

ブータン出張報告

堀内みどり

6月30日から7月3日にかけて、ブータンの首都ティンブーで開催された第4回南・東南アジア地区宗教学宗教史会議(4th SSEASR International Conference)に参加し、発表した。これは、世界宗教学宗教史会議の南・東南アジアを管轄する地区組織が開いた国際大会で、世界各国から約350人が参加し、「南・東南アジアの諸宗教における山：場所、文化、力(Mountains in the Religions of South and Southeast Asia: Place, Culture, and Power)」をテーマに約190の研究発表があった。担当校は王立ブータン大学言語・文化研究所(Institute of Language and Culture Studies, Royal University of Bhutan)で、ペマ・ティンレー副学長を中心に約200人の学生がボランティアで運営に携わった。

6月28日0時30分発タイ航空で出発、バンコクでドゥルックエア(ブータン航空)に乗り換えて、ダッカ経由で9時50分にパロ空港着。飛行機で日本からブータンに行くには、バンコク経由、インド(コルカタ、デリーなど数カ所)経由、カトマンズ経由の3通りしかなく、パロ空港が高い山々の深い谷に位置することから、天候によって飛ばないことがある。パロは世界で2番目に離発着が難しい空港だといわれているらしい。ドゥルックエアは2機の飛行機を8人のパイロットで運航しているとも聞いた。パロ空港では、学術大会用に準備されたヴィザ許可者一覧表を提示して、ヴィザ代を払って入国を許可される。学生たちに出迎えられ、5台のマイクロバスに分乗、約1時間かけて曲がりくねった山道を首都ティンブーに向かい、市内のホテルに分宿した。



会場入口に設けられた歓迎門

6月29日は主催者が企画したティンブー市郊外の山を登るトレッキングに参加。約半日のコースで、帰路、国の動物であるターキン(takin 毛の長い鹿のような短足丸顔でウシ科の動物)を見学。

6月30日から7月3日まで研究発表。会場は、市中のホテルから坂道を車で20分くらい登った通称RITHと呼ばれる松の森に囲まれた王立のツーリズムとホスピタリティを研究する機関の建物が使用された。30日には、開会式に先立ち、この国際会議が無事成功裡に終わるようにと、招かれたチベット仏教の高僧による儀礼と祈りがあった。その後3人の基調講演があり、午後からは5部屋に分れてのパネル発表となった。発表者は、だいたい4人から6人ほどでパネルを組み、全体で31

のサブ・テーマのもと、45のパネル(190余人)発表となった。堀内は、1日午前「南・東南アジアにおける諸宗教の地形および地理(The Topography, Geography of Religions in South and Southeast Asia)」のパネルで「ヘランブの宗教についての一考察(A Religious Study of Helambu)」と題して発表した。1978年7月天理大学ふるさと会の海外研修基金でネパールに行ったとき、ヒマラヤの山麓にあるヘランブという村の「ナラ祭」に出会った。ヘランブは今も初級者向けのトレッキング先として人気があり、その途上ではチベット仏教とヒンドゥー教の文化の差異や融合を見聞することができる。また、ヘランブはシェルパ族の村としても有名で、シェルパ独自の文化とチベット仏教両方の特徴を知ることができる。今回はこの「ナラ祭」における「女の部屋(家)」のことを念頭において発題した。なお、日本からは7人が参加した。

7月2日の午後には、主催者による市内案内が盛り込まれ、大仏(建設中)、第3代国王のジグミ・ドルジ・ワンチュクの死後すぐに彼を讃えるために建設された仏塔メモリアル・チョルテン、市内で一番古いゾン(僧院)、市の北端にある要塞で、ブータン仏教界の総本山タシチョ・ゾン(Tashichoedzong、ティンブー・ゾンともいう。国王の執務室のある王宮、国会議事堂や行政機関が隣あっている)を見学した。あいにく雨でタシチョ・ゾン境内では傘をさすのも被り物をするのも禁止されていたので、雨に濡れることになった。



メモリアル・チョルテンのマニ堂で読経する人々

7月2日を除き、文化プログラムが盛り込まれた夕食が毎回用意され、歌い、演奏し、演技するのもボランティアで運営に参加している学生たちだった。7月1日のプログラムはブータン王立大学のパーフォーミング・アーツの学舎で行われ、演者もその学生や教員で、たいへん素晴らしいものだった。

最終日の午後には、総括と閉会式が行われ、今回の会議で研究発表を行った者一人ひとりに証書が手渡された。

7月4日11時の便に乗り、5日7時に帰国した。

なお、ブータンは、前国王が提唱した国民総生産にかわる国民総幸福量(GNH)という概念やさまざまな環境政策およびスローライフの国として知られている。伝統文化保持のため、国民は民族衣装を着用することが多く、また、教育を英語で行っているということでも知られている。パロからティンブーおよびティンブー市は建設ラッシュの様相を呈し、鉄筋コンクリートの建物にブータン文化を示す独特の文様のある庇にトタン屋根という構造が一般的で、インドなどから来た労働者が重機なしで作業していた。

第20回宗教研究会「現代世界の“死”に見るいのちの危機と宗教の課題（3）」（7月21日）

金子 昭

台湾・国立中山大学助理教授の廖欽彬^{りょうきんひん}氏と上智大学グリーンケア研究所主任研究員の小西達也氏を講師としてお招きして、標記研究会が7月21日におやさと研究所会議室にて開かれた。このテーマでの研究会は昨年度から始められたもので、今回で3回目になる。

まず、「講演1」として、廖欽彬氏が「慈済の死生観と宗教的実践」について発表された。台湾に拠点を置く世界最大の仏教NGOである慈済（財団法人・慈済基金会、慈済会ともいう）の設立と歴史について紹介した後、廖氏は慈済病院を中心とした同会の医療事業について、とくにその死生観がよく現れている「献体」について言及。台湾で慢性的に不足していた献体の数は、證嚴法師による菩薩精神の唱導により一挙に増大した。現在では、献体カードの所有者は2万7千人、献体を果たした「無言良師」は700人に上っているという。これは慈済の活動が成功した一事例である。

一方、2009年8月に発生した台風8号による大災害の後の支援活動においては、慈済は思いがけなかった文化摩擦に直面する。それは、土石流で押し流された先住民族の村を、慈済が独自に「永久住宅」の村落として新たに建設した際に起こった。漢民族が大半を占める仏教系の慈済が、キリスト教（カトリック）が多く、独特の伝統を持つ先住民族の人々を、自らの流儀でもって完成させた村落へ移住させたがゆえに、生活習慣や文化、信仰の相違から多くのあつれきが生じたのである。このことが大きな社会問題になり、慈済も声明文を出して弁明しなくてはならないほどであった。この事例では、善意ばかりが先走ってしまったために配慮が不足し、かえって先住民族の人々の「生命の躍動」に反する事態を生じさせたのであると、廖氏は指摘された。

次に、「講演2」として、小西達也氏が「東日本大震災とグリーンケア」について発表された。小西氏は実際に被災地を訪れ、専門家による心のケアのニーズの高さを実感したという。その場合、他の地域からの「遠隔地ボランティア」として行うケアには幾つかの方法論が必要になる。小西氏は、現地のとりまとめ役とのルートの確立、医療チームの一員としてのアクセスや避難所のリーダーなど「上位者」へのケアの専念が有効であることを指摘された。また廖氏の発表とも関連するが、地域の自立性を考慮することはきわめて大切なものである。

被災地では、多くの人々が親しい人や大切な物、また地域での関係性を喪失したことにより、グリーンケア（悲嘆）のただ中にある。グリーンケアは、こうした喪失体験を有する人々のグリーンワークに対して傾聴（スピリチュアルケア）を通じて心の支援を行っていくのである。近年のグリーンケアにおいては、亡くなった人を忘れ、その人がいない現実への適応ではなく、亡くなった人の思い出を胸に抱きながら、新たな人生を生きていくという、故人との「新たな関係性」を構築する方向性が基本となっている。こうした心のケアには細心の注意が必要であり、

ケアの提供者には、自らの価値観の自覚化が必要であると、小西氏は結論づけられた。

私（金子）が両氏の発表についてコメントを行い、その後、活発な質疑応答が行われた。今回の研究会は、日台の比較宗教文化的考察も交えながら、宗教者が被災地で活動するさいの心構えや地域の文化や伝統の尊重、またケアの際の専門的知識の必要性について学ぶ貴重な機会となった。



研究所前で
左から小西達也氏、金子、廖欽彬氏

京大「災害と宗教」シンポジウムにて研究報告

金子 昭

「災害と宗教と『心のケア』—東日本大震災の現場からの報告と討議—」というシンポジウムが、7月20日京都大学稲盛記念財団記念館にて開催され、私もパネリストとして参加した。このシンポジウムは、「大震災後を考える—安全・安心な輝ける国作りを目指して—」という京都大学シンポジウムシリーズの一環として、同大学こころの未来研究センターの主催により行われたものである。

同センター教授の鎌田東二氏による趣旨説明の後、基調報告と事例報告が行われた。基調報告としては、東京大学教授の島藺進氏が自ら代表を務める「宗教者災害支援連絡会」の活動と課題について発表し、続いて作家で僧侶の玄侑宗久氏が福島県内の被災地と支援の現状、また政府の復興構想会議（玄侑氏も委員の一人）について報告を行った。事例報告としては、大阪大学准教授の稲場圭信氏が自ら代表を務める「宗教者災害支援ネットワーク」の活動と課題について発表し、私（金子）が「新宗教の災害支援活動の事例と課題—とくに「心のケア」に関して—」というタイトルで、主に天理教の活動を事例に取り上げて報告を行った。

その後、指定討論者として、こころの未来研究センター教授の河合俊雄氏（臨床心理学）と内田由紀子氏（文化心理学）によるコメントがなされ、4人のパネリストを交えて総合討論が行われた。

福島出張報告

佐藤孝則

8月1日から5日にかけて、福島県内の福島市、いわき市、相馬市、広野町、飯舘村で、東日本大震災および東電福島第一原子力発電所による放射能汚染事故の現状調査を行った。詳細は、27日に天理大学9号棟で開催する緊急企画「東日本大震災における天理教の救援」のなかで報告する。